

奈文研30年

1976年入所以来、途中、奈良市にいた3年間を除けば、ちょうど30年ということになる。その間、平城、藤原、飛鳥資料館、埋文センター、企画調整の各部署を経験させていただいたのであるが、「それぞれ、いついたの」と尋ねられると、自分のことながら、あやふやな答えしかできない。人間の記憶というものは、なんといい加減なものなのか、それとも個人的な問題なのであろうか。



前列左から、西村管理部長、千田上席研究員、山崎副所長、山中文化遺産部長
後列左から、小林企画調整部長、飯田業務課専門職員、西口考古第二研究室長

奈文研は昼休みのサッカーが盛んで、入所すると、何よりもまず足の大きさを聞かれる、というまことしやかな噂を耳にしていたが、私の場合は、なんのまえふりもなく突然、「お前は青だな」であった。これは予想外のことであって、サッカーのチーム分けで青チーム、ということを理解するまでにいささかの時間を要したことは言うまでもない。また、3ヶ月にも及ぶ発掘現場を乗りきる体力を養うためにも、昼休みのサッカーはもってこいであるとも言われた。入所2年目から3年目にかけて、平城で1～3月、現場班の編成替えで引き続いて4～7月、さらに、飛鳥藤原へ異動して12～3月と、数多くの発掘現場を経験することができたのも、きっとサッカーをしていたおかげであろう。もっとも、サッカーでは、おでこを切ったり、頭を縫ったり、いろいろとお騒がせしたのであるが…。思えば、それぞれ前厄、本厄の年であった。因みに後厄の年は、奈良市へ異動したので、怪我する機会は失われた。

奈文研では、何度か出入りした平城が一番長かったのであるが、いずれも、土器を避けた異動であった。入所して新人研修を受けていた頃に、「お前、土器の図…、まあ、ええわ」と言ったT部長の一言が思い出されるのである。それはともかく、もともと、それほど器用でもないのに、自分でやってみることが好きで、学生時代にはタガネを作って、遺物と同じように、文様を彫ったり透彫をしたりしていた。そういうわけで、奈文研で飛鳥寺出土挂甲の復原に携わることができたのは、望外の幸せであった。また、弓矢を作り飛ばすこともした。実際にやってみると、頭の中で考えていた通りにはいかないことや、逆に思いもよらないことがわかったりすることがあり、結構「どきどき、わくわく」しながら進めたものである。

こんなことを書き続けていると、今度は「お前、研究所の仕事…」と言われそうである。「まあ、ええわ」と言ってお許しをいただきたい。30年間、お世話になりました。（企画調整部長 小林 謙一）